まちと結んで村を守る

千葉県 多古町 旬の味産直センター

朝市から学校給食へ村の元気が広がっていく

1　元気な野菜をたくさんの人に

朝市――カアチャンたちが元気のでることをやろう

千葉県の房総半島のつけ根にある、成田空港の近く。北総台地といわれる肥沃な畑作地帯に多古町はある。

山あいの低地では昔から、味のいい米がとれてきた。大量生産ができないのであまり有名ではないが、〝多古米〟は江戸時代から寿司用の米として珍重されてきた。関東ローム層のはずれにあたる台地では、サツマイモやニンジンなど根ものを中心とする野菜が栽培される。

水田、畑、山林がほぼ三分の一ずつという恵まれた自然環境のなかで、約二二〇〇戸の農家がいる農業地帯だ。

この多古町で一〇年ほどまえ、農民たちの有志が「農業と暮らしを考える会」をつくった。農業を守るだけでなく、町をもっと活性化させたいと願う人たちの集まりだった。初代会長だった所英亮さんたちが中心になって最初におこなったのは、町役場の駐車場を借りての「朝市」だった。

「全国の平均でもそうですが、この多古町でも農業にたずさわる家庭の八五%が兼業農家なんです。おいしい米も、九割以上はその人たちが生産をささえてるんですね。この町の活性化を考えたとき、何が大事になるか。大きな工場もないし、他に地場をささえる産業もない。やっぱりなんていっても、農業をポイントに考えていかなくっちゃなんないんです」

夫が働きにいっているあいだ、耕地を守って農業をつづけているのは兼業農家の主婦だった。主婦たちを活気づけなければ、町全体の元気もでない。

「カアチャンたちに、元気のでることを何かやろうや」

話しあうなかから出されたのが、みんなで朝市をやろうというものだった。

同じ千葉県内でも、当時すでにいくつもの朝市が実行されていた。多古町からそれほど遠くない酒々井からも、毎週日曜日の朝市が大好評という話が届いていた。

アイデアにはみんな賛成したが、いざ取りかかろうとすると、二の足を踏む人がほとんど

だった。酒々井には、一〇〇〇戸からはいっている団地が近くにある。朝市の成功は、ふだんはスーパーなどしか利用できない消費者たちの、新鮮な野菜がほしいという要求にささえられているのではないか。多古町には、大きな団地もなければ、人口の密集している市街地さえもない。典型的な、純農業地帯。こんなところで朝市を開いても、お客がきてくれるのだろうか。議論は二、三年つづいた。

「そんなの、むりだっぺ」

不安をいだく人の多いなかで、八六年二月から多古町の朝市が開始された。やってみると、現実が農民たちを元気づけた。当初、毎週二回おこなった朝市では、並べる野菜が飛ぶように売り切れてしまった。

実現への力になってきた朝市組合の鈴木清志さんや柴田恒夫さん、佐藤修弘さんには成功の見通しが始めからあったのだという。

「たしかに、酒々井なんかには大きな団地があります。けど、待てよと私ら思った。じゃあ、この多古町の消費動向はどうなってるんだ。調べてみたら、農家だって野菜の自給をしている家は三〇%しかなかったんです。農家だって、半分以上は消費者なんだ。なら朝市はできないはずがないって、始めたんです。地元の人だって、おいしい野菜を求めていたんですよ」

文化性のある朝市を

九年がたったいまでも、多古町の朝市は毎週おこなわれている。日曜日の朝六時になると、町役場の駐車場にはたくさんの町民が集まってる。ニンジン、大根、キュウリ、ほうれん草などの農産物に、きれいな花や漬物まで。車でつんできた農民たちが店を開くと、今かいまかとまっていた消費者の人がどっと押し寄せる。ほんの三〇分ほどもすると、主な商品はほとんど売り切れてしまう。こんな光景が、正月などを除いたほとんど毎日曜日、多古町では繰りひろげられている。

ただ野菜を売るだけではもったいない。地域に活気を呼ぶために、文化性のある朝市にしたいと農民たちは考えた。フォークシンガー、わらび座の舞踏、韓国仮面劇の芝居など、多彩な催しが朝市をいろどり、人びとの心を豊かにしてきた。

自分たちのつくるのは、栄養のある元気な野菜。この野菜を、もっともっとたくさんの人に届けたい。「カアチャン」たちが朝市で元気になると、農民たちの願いはさらにひろがっていった。

2　給食は教育だ

名称へのこだわり――「旬の味」

「多古町の子どもたちが、なんで多古でとれた米や野菜を食べないんだろうか」

農民たちの疑問は、そこへむけられていった。

自分の孫や子どもたちが、毎日学校で口にしている学校給食。最近では米飯給食も、全国的にたくさんの学校で実施されるようになっている。この給食には、どんな材料が使われているのか。

学校で聞いてみると、多古町の子どもたちはパンを食べている。多古でおいしい米や野菜がとれるのに、地元の農産物は子どもの口にははいっていない。

ちょうどそのころ、多古に隣接する干潟町でも調査がおこなわれた。干潟町では、中学校まで米飯給食が実施されている。多古の中学生と比べると、給食以外の日常の食事のなかでも、米の摂取量に圧倒的な差のあることがわかったのだと、現在の多古町旬の味産直センター専務理事である高橋清さんはいう。

「給食でご飯を食べていない多古の子どもたちは、ふだんの食事でも米離れを進行させている。これじゃあいけない。給食は食べることをつうじた、日本の食文化の教育なんだ。なんとか自分らのつくる米や野菜を、地場の給食にいれようって運動が始まったんです」

より多くの農家を結集するために、八六年には農事組合法人の多古町旬の味産直センターが設立された。

わざわざ「旬の味」という名称にしたのは、旬の農産物をつくって届けたいという思いの他にも理由があった。多古あたりでは昔から、農民が自分たちで食べるためにつくる野菜を

〝しんのみ〟と呼んでいた。それは〝味噌汁の実〟にするための野菜。つまり〝汁の実〟がなまったものだといわれる。自分たちで食べる自家用野菜は、農薬も化学肥料も使わない安全な野菜。しかも、旬のものばかりだから栄養も豊富にある。そういう野菜を消費者に届けたい。その思いから、センターでは最初〝しんのみ〟とつける案も浮かんだ。だが、それではわかりにくいということで、〝旬〟を名称にもってきた。いまでは〝しんのみセンター〟は、愛称になっている。

産直センターまでつくって地元学校給食に農産物をいれる運動をしたが、実現への道は遠かった。給食調理施設の問題や、すでに学校給食に野菜をいれている地元の八百屋との関係などがあり、行政側がなかなか門戸を開こうとしなかったのだ。

品川区の学校給食へ

自分たちのつくる野菜を、学校給食で子どもたちに食べさせたい。集会や教育関係の集まりで産直センターの人がいつも訴えているうちに、「いのちをはぐくむ学校給食全国研究会」の雨宮正子さんが話を聞きつけた。

安全な野菜があったら、産地から届けてほしい。雨宮さんのもとには逆に、都会の学校の栄養士や調理員から、産直野菜を使いたいという情報がたくさん寄せられていた。そのうちのひとつ、東京都品川区に紹介すると、教育委員会が先頭になって産直の可能性を調べてい

った。

品川区ではすでに七四年から、当時の山下教育長の命令で給食に安全な野菜を使えないかの調査を始めていた。子どもたちが毎日口にする学校給食にも、添加物や農薬のない安全な食品を使ってほしい。高まりつつある市民の声を受けたものだった。

教育委員会学事第二係の城山享子さんは、何もわからないところからあちこちあたっていった。産地として対応するには、学校給食は量があまりでない。ジャガイモ、タマネギ、ニンジンは必ず必要とするなど品目も限られているので、生産者側からは事業としてはあまり喜ばれないこともある。八一年になってようやく、長野県の八ヶ岳にある中央農業実践大学からの供給を受けられるようになった。九月から一月まで、多いときで三〇トンほどのジャガイモを。

「学校給食への産直は、ただ子どもに安全な食べ物をというだけでは、いけないんだってわかってきたんですね。給食は、味覚を育てるでしょ。将来の消費者として、子どもたちが食物の選択を正しくしてくれるようにならなければ。食べ物の自然の姿を知った子どもたちは、きっと正しく考えて行動をとってくれるようになると思うんですよ」

お互いの考えが一致していることがわかって、多古町旬の味産直センターから品川区への野菜供給は、八七年から始まった。

野菜を送りだしてからしばらくして、産直センターの人たちは不思議な注文を受けた。

「ニンジンを少し、葉っぱがついたまま送ってくれませんか」

都会の子どもたちの周囲には、畑も田んぼもない。いつも自分たちの口にしている野菜が、どのようにして育つのか。どんな形で生えているのか。自然の姿を知らない子どもたちに、ほんものの野菜で伝えたい。そう願っていた、先生からの依頼だった。

葉のついたニンジンを送って少しすると、多古町旬の味産直センターにはかわいいお礼状が何通も届けられた。

「にんじんのはを見たのは、生まれてはじめてだと思います。がい虫を一ぴきずつ手でつぶすのはたあいへんだと思います。でも、わたしは、そのことをしてもらってうれしいです。のうかの人みんながそうだったらいいのにな」

「にんじんがでる日、ぼくはやだなとおもうけど、がんばってたべます。そしてたべてみると、おいしいから、だれがこのにんじんつくったんだろうとおもっています。そして、おかわりのとき、おかわりします」

学校給食は教育だ。そういう考えはあったが、実際にやりだしてみると教えられることばかりだったと高橋さんはいう。

品川区でも、行革推進の口実で学校給食がセンター方式に切り換えられたり、調理員数を削減する政策が進められた。そのとき、この安全で栄養豊かな給食を絶対に守らなければと、立ち上がってくれたのはお母さんたちだった。多古の農民たちが手塩にかけて育てた野菜を、

調理員たちが心をこめておいしい給食にしていたからこそ、みんなが守らなければいけないと思ってくれた。自治体労働者と保護者と農民の力があわさって、品川区の学校給食は行革の波を防ぐことができた。

「いっしょに手を結んで、子どもたちの食を守りましょう」

栄養士や調理員から呼びかけられたとき、多古の農民たちは初めて実感した。地域の農業や自然、働く人の関係などを、正しく教えていく力が学校給食にはある。だが、政府の農業政策は農民を抑圧し、日本の農業を危うくしている。自治体労働者たちにかけられている行革の攻撃も、まったく同じようなもの。農村にいても都会にいても、立場はちがっていても、みんな共通の思いで歩いていける。自分たちの運動は、日本の農業を守るためだけではない。都会の人たちの食や健康を守っていく、最前線にも立っているんだ。

3　農村を丸ごと届けたい

「野菜ボックス」——消費者と直接結びつく

発足して一〇年近くがたった多古町旬の味産直センターの特徴は、「野菜ボックス」を生協や新日本婦人の会、一般消費者などにたくさん送り届けていることだ。

始まりは、朝市にだされている野菜を箱にいれて、都会にいる兄弟や知人に送ったことだ

った。思いがけずに好評だったところから、ひろがって事業として定着していった。

「野菜ボックス」の仕組みは、段ボールの箱にはいった七、八品目の野菜や卵などを、毎週送り届けるもの。消費者が品目を選択することはできないから、生産者側のセンスと責任が大事になる。年間とおして送るようになるので、多種類の野菜を生産していなければならない。

「そのてん、兼業農家の集まりである私たちには、このやりかたがぴったりだったんです。兼業農家が多いから、きまった品目を大量に注文されると困る。だけど、細かなものをいろいろ組み合わせるのはできる。年間一〇〇品目からの野菜をつくるんで、バラエティーの富んだ箱にもできるんです」

産直は心と心を結ぶ

七夕の季節には、笹の枝。秋の月見どきにはすすきの穂。季節を感じさせる自然の恵みをいれることもあるので、都会の消費者には感謝される。学校給食の子どもたちには、かぶと虫の幼虫を送ったこともあった。

産直は、ただ農産物を送る事業だけではない。食べ物をとおして、消費者と生産者、都会の人と農民たちとが、いろいろな形で結びついていくもの。多古町旬の味産直センターの人たちはそう考え、何よりも交流を大事にしている。センターには、年間五〇〇〇人の消費者

が訪れる。

消費者たちは田植えや稲刈り、イモ掘りやトウモロコシ狩りを楽しみ、グリーンファームという体験農場で多古米のおにぎりを食べて自然と農村を満喫する。多古が都会の人たちの「田舎」になる一日だ。

昨年からは、産直センターとして季刊の雑誌を発行している。農村である多古には自然の素晴らしさばかりでなく、数百年をこえる人びとの歴史も、積み重ねられてきた文化もある。都会では失われてしまった日本古来の文化もふくめて、農村のもっているすべてを届けたいと考えたからだ。

「しんのみ」のような、安全で栄養のある野菜を栽培する。それを消費者に届けることで、兼業農家を励まし、日本の農業を守っていく。センターの果たしてきた役割は、多古の地元にとってだけ価値があるものではなかった。都会の消費者には、安心できる食を確実に届ける供給基地になった。食べ物の交流は、いつしか人の交流となり、文化の交流へと発展した。

まちと結んで、村を守る。村の力で、まちから失われていくものを守っていく。多古の人びとは産直を通じて、信じ合う心という太く大きなきずなを手にいれた。

取材を終えて　産直からみえてきたもの

もう一〇年近くまえから産地を歩き、生産者たちと対話をして産直のルポを書きつづけてきた。訪問した産直組織の数は、北海道から沖縄まで五〇以上にのぼる。

この仕事を始めるまえ、私自身はまだ見ぬ生産者たちの取材にはいることにためらいを感じていた。ちょうど農産物自由化の動きが激しくなり、マスコミでは各地の離農や厳しい農業情勢ばかりが報道されていたころだった。

産直とはいえ、生産者には展望などないのではないか。きっとどこへいっても、暗い話ばかりなのだろう。そんな予感をもって産地を訪れると、出会う農民たちは誰も彼もがとてつもなく元気で活き活きとし、将来に希望を抱いている人たちばかりだった。

「この人たちは、いったいなんでこんなに元気なんだろう。この人たちを力づけているものは、なんなのだろう」

私の産直への取材は、この疑問を解きあかしていくところから始まった。たんに取材という一時をこえて、徹底的なつきあいを始めた。なかには何年にもわたって、親しい交際をしていただいている生産者もいる。

そういうなかからみえてきたのは、まず第一に、みんな心の底から農業が大好きな人たちばかりだということだった。もともと自然が好きだということもあった。田舎に生まれ、農

業をしている親に育てられた。その親の姿を見ているうちに、自分の意思で農業を継いだ人たちだった。

農業は、家庭と仕事場が一致している。自然に立ち向かい、力強く農作物を育てている父親の姿。その父親と力をあわせ、家庭を守りながら泥まみれになって自分たちを育ててくれる母親の姿。そんな両親の姿を見ていれば、農業が好きになるのも不思議ではない。

大好きな農業に、思う存分力を発揮することができる。その確信が、産直の農民たちの元気をつくりだしていた。

もうひとつは、すべての農業が大自然のなかで、自然の摂理にもとづいておこなわれているという基本的な事実だった。毎日、美しい自然のなかで働いていれば、だれだって元気になるのではないだろうか。

そうはいっても、これらの条件は産直にたずさわっていない生産者にしても同じはず。ここまでのことだけならば、いまの日本の農業情勢では、将来への展望などなかなか見えてはこない。

産直はそこに、都市の消費者とのつながりという、新しい贈り物を生産者たちに届けてくれた。

「ミカンを送ると、必ず何人かの人が便りをくれる。おいしかった。また来年も楽しみにしているなんて書いてあると、涙がでるほどうれしいよね」

「俺のつくったものを、俺がつくったってわかって食べてくれる人がいるってこと。励みになるんだよ。まずかったらまずい、苦情があったら苦情だけでもいい。直接声を届けてくれることで、またうまいのをつくろうって元気がでてくるんだよな」

生産者たちは例外なく、消費者と直接つながりあえたうれしさを、口々に表現してくれる。「商品」づくりではない、農業が本来もっていた喜びがそこにはあった。都市の消費者が感じていた産直の素晴らしさは、生産者たちにも何倍もの感激をもって共有されていたのだ。

ところが、何年か取材をつづけているうちに、生産者たちの言葉に少しずつ変化がみられるようになった。生協や消費者がかわってきた。産直の本来の意義が、理解されなくなってきた。多くの生産者が、産直や農業の未来への不安をまた感じだしていた。

都市の消費者たちの生活に目を移すと、たしかにここ数年の様変わりには激しいものがあった。

万単位から十万単位へと規模を拡大し、それにみあった事業展開を求められるようになってきた生協。「低価格」「利便性」「外見」……。いくつかある選択条件のひとつとして、食べ物の「安心・安全」さえも同列にしか考えなくなった若い生協の組合員たち。生産者たちが従来どおり産直をつづけていく環境は、日増しに厳しいものになってきているのは事実なのだ。

より便利なもの。簡単に手にしやすいもの。安楽なもの。産直を選択しながらも、消費者

たちの要求は少しずつちがうポイントに移ってきたように思える。しかし、それはほんとうに、二一世紀に展望を開く産直。子どもたちの世代の暮らしを守っていく産直に必要なものなのだろうか。

資本主義経済が爛熟期になったともいえる、二〇世紀の終末近くになって、人びとが暮らしの協同のなかでつくりあげた産直というシステム。農民と消費者が力をあわせて、市場経済の流れにさからって生み出してきたものはなんだったのか。生産者の立場から、産地の視点からそれを考えたとき、消費者の姿勢の変化には、農民たちと同じく危機感をつのらせずにはいられない。

便利だからというキーワードにつられ、市場経済の発展のなかにとりこまれることで失われてきた、人間くさい出会いから生まれるものこそが、産直の教えてくれたものだったのではないか。

産直には、地域と地域を結びつけ、文化さえも生み出す豊かな人の交流があった。現代の消費文明のなかで失われてしまった、生産文化の継承があった。商品経済万能のなかで見えなくなった、人と人とを直接結んでいくことから生まれる喜びがあった。人間が生身の人間としてそこに現われ、ぬくもりをもった存在として触れ合えるたしかさがあった。

産直には、私たちが二〇世紀の資本主義社会のなかで失ってきた、「人間が人間になるために必要としてきた決まりごと」があった。私たちは資本主義社会の快適さのなかで、その

「協同して生きていく」という決まりごとを忘れそうになってきた。私たちは、人間であることさえも、失ってしまいそうになっていた。

私たちは、次の時代を生きていく子どもたちに、私たちが生きてきたよりももっと豊かな社会を手渡したいと願う。産直はそのために、私たちがいちばん基本的に大事にしなければならないものがなんだろうのかを教えてくれた。

あと五年もすれば、二一世紀が始まろうとしている。新しく始まる世紀にも、産直がしっかりと息づき、人びとの暮らしや農業を永続的に守っていってくれることを願わずにはいられない。